



## スイスでのインターンシップ

高知大学の小崎大輔先生よりバトンを受けました、(公財)地球環境産業技術研究機構の高山です。私が修士課程の時、群馬大学で日本学術振興会・特別研究員をしていた小崎先生に、博士課程進学のご相談をしたのがきっかけで、今でも公私ともに親しくしていただいています。2017年3月に学位を取得してから間もないですが、このような機会をいただけたことに感謝申し上げます。私は学生時代、液体クロマトグラフィーの高性能化に関する研究を行っていましたが、現在では二酸化炭素分離回収のための材料開発に携わっており、化学工学や材料科学といった分野に身を置いています。一見、異なる分野にも思えますが、物を分けるという意味では何かしらの相互作用や吸着現象を利用しており、分離メカニズムに視点を置いたとき、非常に近い分野であると考えることができます。また、開発した材料の評価には分析機器が欠かせず、むしろなぜ「分析化学」と「化学工学・材料科学」との交流が少ないのか疑問に思うくらいです。

さて今回のエッセイは、海外インターンシップをテーマにしました。海外での研究歴のある方は他にもいらっしゃると思いますが、私は幸運なことに、博士課程在学中スイスに本社のあるメトローム社で半年間のインターンシップの機会を得ることができました。メトローム社は、外資系分析機器メーカーですが日本でもユーザーは多いと思います。博士課程修了には、学外研修が最低3ヶ月間必要でしたが(国内でもOK)、指導教員の一人であったリム准教授(岐阜大学)が受け入れ先を探してください、メトローム社の寛大なご厚意により実現したプログラムです。私は海外が好きなので、工学部の短期派遣プログラムなどを利用し、数週間でしたら海外に滞在したことはありましたが、半年という長期間の経験はありませんでした。しかも留学ではなくインターンシップということで、働いたこともない自分がいきなり海外で研修などできるのか、非常に不安になったのを覚えています。ただ、入社初日に受けた安全教育や研究内容の説明で、幸い相手の英語が聞き取りやすかったこと、研究内容もそれほど難しくなかったこともあり、これなら問題なく研修期間を過ごせると、抱いていた不安はほとんど解消されました。研修中、会社が借りているアパートに住み片道40分ほど歩いて出勤していました。散歩好きの私にとって、長時間歩くことは問題ありませんでしたが、靴のかかとの部分がすり減り、半年間で3、4足靴を買って換えました。少しづらかったのが、早起きです。始業時刻が早いので、毎日7時30分には入社して



図1 氷河特急とマッターホルン

いました。会社から給料をいただいていたので休日は、毎週出かけていました。特にスイスは、観光大国として知られており、観光地が全土に点在しています。おまけに、近隣諸国にも容易にアクセスできるため(といっても電車で片道5~6時間かかりますが)長期滞在するには最高の場所であったと思います。インターンシップでありながら、有給休暇も付与されていたので週末に連休を調整し、電車旅を繰り返していました。スイスで最も有名な氷河特急でマッターホルンまで行けたときは、本当に贅沢な気分でした(図1)。この時は夏で、窓から見える芝が輝いており、7時間乗車していても全く飽きませんでした。

後から考えても、このプログラムは非常に運が良くないと実現できなかったと思います。ビザの申請や現地での口座の開設、保険の加入など一人でできるはずもなく、メトローム社のスタッフには全面的にサポートしていただきました。給料面や生活環境も十分すぎる待遇で感謝してもしきれない思いです。今回ご紹介できたのはほんの一部で、数えきれないほどの格別な経験をさせていただきました。

今回のエッセイは金沢大学助教の西山嘉男先生にお願いしました。西山先生とは、学会の懇親会でお会いし、当時学生であった私にも気さくにお話してくださいました。最近のご無沙汰していたので、ご連絡するきっかけができるのもリレーエッセイの魅力だと思いました。西山先生、お忙しい中、急な依頼にもかかわらず快くお引き受けくださり、本当にありがとうございます。2018年最初となる先生のエッセイを心待ちにしております。

〔(公財)地球環境産業技術研究機構 高山信幸〕